



社会医療法人近森会

発行

2014年3月25日

びろっば

4

Vol.333

www.chikamori.com ● 高知県高知市大川筋一丁目1-16 〒780-8522 tel. 088-822-5231 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

2014年診療報酬改定

近森会グループ
診療支援部部长 寺田 文彦



改定の概要

今年の4月より利用する、新しい診療報酬の点数が決まりました。今回の改定は、各医療機関に病棟ごとの機能の明確化を求め、都道府県ごとに医療計画の具体的マスタープランの作成・権限強化を与える幕開けとなります。改定額については、財務・厚生労働省の両大臣の譲歩で0.1%のプラス改定(実質▲1.26%のマイナス改定)となり、消費税8%対応の方法や基金創設など、医療関係者でも分かりづらい改定報告となりました。

具体的な内容

具体的には、

①全国的な看護師不足による需給バ

ランスの調整を診療報酬で適正化するため、入院基本料の看護配置基準や、各ステージの「重症度、医療・看護必要度」の評価精度を上げる。

②実績ベースでの入院基本料の支払いを行うため、入院時の重症度や退院時の機能改善など、重症患者の受け入れを行っている病院の評価を行う(病院の差別化)。

③時間外・休日・深夜に行う手術や処置など人的資源の負担が大きい救急治療の評価を行う。④大規模病院と中小病院・診療所との間で外来機能の役割を明確化し、紹介・逆紹介を推進するなどです。

いずれも高齢化で増加する、重度且つ複数疾患の患者対応が急務であり、医師・看護師・コメディカルの役割分

担やチーム医療による効率的な医療提供が求められております。

自己負担について

今年70歳になる患者さんより、一部負担金が原則2割になります。既存の70~74歳の方は変更ありません。また消費税が8%になり、来年予定の消費税増にも対応するために、診断書や室料差額などの料金を消費税抜きの表示に書き換えをしています。

今後の体制について

これまで近森会グループで行ってきた、職員のモチベーションを保ちながら、医療の質を向上させ、効率的な医療を継続することに変わりはありません。これからも病院や診療所や施設なども含め、「地域包括ケア」を医療、介護、在宅にてシームレスに行う、連携と協業の大切さを改めて明示した改定であると思われます。

以上、ご不明な点があれば、最寄りの総合受付や医療相談室にてご確認ください。 寺田 文彦

その時 歴史が 動いた

その3. 日本式栄養サポートチーム誕生の瞬間

骨格筋が乏しく低栄養と廃用を伴う高齢者の医療は、栄養サポートとリハビリが車の両輪といえる。リハビリは平成元年に開院した近森リハビリテーション病院でリハビリスタッフを大量に養成、急性期の近森病院においてもリハビリが盛んに行なわれるようになった。

一方、栄養は大事だと分かっていたが、どうサポートすればいいのかが分からなかった。そこで2002年1月、現・臨床栄養部長の宮澤靖さんに近森に入ってもらった。部長長会で脳神経外科の高橋潔先生から、栄養サポートチーム(以下NST)の立ち上げの提案を受け、2003年7月から管理栄養士4名体制で近森病院のNSTを開始した。夜10時11時まで頑張ってく



近森 正幸

れたが、必要とされる患者さんに適切なサポートが出来ず、アウトカムは出なかった。

ICUでのNSTカンファレンスの後、

宮澤部長と歩きながらどうしたらいい栄養サポートができるのか話し合っていた。2006年の夏の或る日、いつものように本館北側の橋の上で話の続きをしていたとき、「業務量が多すぎるんだから、人を増やすしかない」とハタと気がついた。日本式NSTが誕生した瞬間だった。

そのときから一病棟一管理栄養士体制がスタートしたが、奇しくも「DPCによる一日包括払い」と「電子カルテ」が導入され、チーム医療の基盤整備が始まった年でもあった。

NSTの質を良くするために、いつものカンファレンスは管理栄養士の専門性を高めるべく教育カンファレンスに変え、質、量ともに向上し、必要とする患者さんすべてに栄養サポートを行える病院になった。

理事長・ちかもり まさゆき

育んできた 「奇跡と軌跡」

近森病院臨床栄養部
科長 佐藤 亮介

▶向かって左から吉田科長、
佐藤科長、上村科長



かつて、名将といわれた織田信長は「人間、五十年……」と謡いました。50年には及びませんが、当部署には30年余りの人生を栄養管理業務に捧げた2名が存在します。近森オルソリハビリテーション病院の吉田妃佐科長と近森リハビリテーション病院の上村

二美科長です。

二人は1983年に近森病院に入職し、その翌年に現・理事長、近森正幸先生が院長職に就かれております。なんと！！勤続年数は理事長先生にも匹敵します。

「給食管理業務の外部委託」や「NSTの設立」、「栄養科から臨床栄養部へ」など、数多の変遷の中、影となり日向

となり、「近森会の栄養」を支え、現在の臨床栄養部の礎を築いてくれた、「栄養部の母」です。

このたび、近森会グループへ就職された皆さん、ほんとうにおめでとうございませう。偉大なる先輩たちが、育んだ「奇跡と軌跡」、一緒に守っていきませんか……。

さとう りょうすけ

4月の歳時記

ランキュラス

近森オルソリハビリテーション病院
受付 川村 久美



幾重にも重なるフワフワとした花びらは1輪に、なんと100～200枚も重なっているそうです。コロンとまあいふフォルムが何とも愛らしく、花言葉も「あなたは魅力に満ちている」と、プレゼントにお花を贈るのが好きな私は春のブーケにはこの花をよく用います。可憐で柔らかな雰囲気女性なら誰しも心踊りますね。

かわむら ぐみ



絵・総務課
広報担当
公文幸子

この連載では「私の流儀」を書くように、とのことでした。気儘に書かせて頂きながら自分の“流儀”があるか？と考えて来ましたが、私が日頃心がけようとしていることを書いて“私の流儀”に代えたいと思います。勿論、人は体力・体質や知力によってその人それぞれの生活習慣を持っていて、誰にでもあてはまる良い習慣があるわけではないと思います。

①しなければいけない小さな仕事は、まず半分だけする。大学病院で、臨床、教育、研究、医局長の4種類の仕事をしてきた時にやむを得ず身に着けた癖です。仕事が発生したら、とにかく直ぐ半分やって寝かせておく(放置する)、その後、ぼんやりとあるいは苦しんで考えているといいアイデアが浮かんで完結できます。勿論、一気にできればそれにこしたことはありません。故中越章平高知医大副学長に、故中山恒明先生の言葉として教えて頂いた「始めたら半分成功、あとの半分はやめないこと。」は大きな仕事に対処する方法ですが、共通点があります。

②書類や文献は系統的に整理しない。

気儘エッセー 11

「私の流儀」に代えて 最終回



近森病院外科部長
たなか ようすけ
田中 洋輔

「超整理法」で有名な野口悠紀雄教授は、使った(集めた)新しい書類(資料)を書類棚のよく使う位置(手前)に置くことを繰り返して、過去の書類を反対側に押し出して行く「押し出しファイリング」を提唱しています。使わないものほど遠い位置に移動するので不要と判ります。文献等を系統的

に分類整理し保管する誘惑に駆られる方がいるかもしれませんが、二度と使わないものもあり、時間の無駄です。

③偶然、余り親しくない人と顔を合わせた場面では、立ち話をする。

エレベーターの昇降とかで少しだけ知っている誰かと面と向かってしまうことがあります。沈黙していると気まずい限りです。こういう時は雑談をするように心掛けています。短時間だからこそ却ってお互いに深入りしない雑談が出来、親しくなれます。多くの女性のごく普通に上手にできていることです。

以上を実行されている方も多いと思いますが、これを「私の流儀」に代えて義務を終えたいと思います。11回にわたり「気儘エッセー」を読んでも頂きありがとうございました。

医療現場での 情報通信技術の活用

近森病院副院長 北村 龍彦



医療情報システムの導入

情報通信技術の進歩には目覚ましいものがあり、今後も加速度的に進歩し続けることでしょう。医療界にとってもコンピューターの導入は革新的技術の導入であり、いろんな分野でパラダイムシフトをもたらしました。

少し振り返ってみますと、日本での医療情報システムの発展は、1970年

代から部門システムが導入されたことに始まり、例を上げると検査部門や放射線部門、そして「レセコン」といわれる診療報酬計算の医事部門システムなどです。

その後1990年代前後からホストコンピュータを用いたオーダーエントリー・システムが導入され始め、医師の指示が伝票で転記されず、直接各部門に伝達されるようになり、会計とも連動するようになりました。このことは看護部や薬剤部、検査部、放射線部などにとって、転記ミスや伝達ミスの防止につながり、格段に利便性と安全性が担保され、医事会計では請求漏れが減少しました。

地域で医療情報の共有化

2000年前後からは電子カルテの登場で手書きの記事を無くして、端末があれば多職種のスタッフ全員がカルテを参照し、記事を書くことができる情

報共有の時代に突入しました。

2010年前後からは一医療機関のみでなく、地域で医療情報を共有し連携する仕組みが始まりました。このシステムは世界中で利活用が図られ、生涯を通じて医療健康情報を電子化して行こうというEHR（生涯健康医療電子記録）構想に発展しています。

機器の進歩と各種データ保存システムの利活用、クラウド化が進み、外科系の分野でも手術手技の機械化、縮小化に向かっています。一例を挙げますと「ダビンチ」というロボット手術機械（遠隔操作）の導入が進み、人工衛星を通じての操作も開発され、戦地の負傷者にも安全な場所において遠隔操作で診断し、手術治療ができる時代になってきています。

問われる倫理観

しかし、なにを成すにも人が行うことであり、そこには幅広い知識と教養、技術とともに高い志と人格、倫理観が問われることと思います。医療の基本は医療者と患者さんやその家族への慈愛の心での対応と考えます。

身近にあるスマホや家庭用のパソコンのメール、SNSなども同様で、安易に利用している善意な人々が幸せに暮らせるように技術革新、基盤整備が進むことを願います。

きたむら たつひこ

● お知らせ 医療従事者対象 ●

- 第132回地域医療講演会
「患者安全能力を高める
シミュレーショントレーニングのデザイン
～院内救急対応システム
RRS (Rapid Response System) の
導入に向けて～」
日時：4月18日(金) 18:00～19:00
会場：管理棟3階会議室
講師：獨協大学越谷病院
救命救急センター長
救急医療科教授 池上敬一先生
- 第133回地域医療講演会
「英国の医療システムにおける家庭医の
役割 ～人に寄り添い、地域で支える
プライマリ・ケアとは」(仮)
日時：5月13日(火) 18:00～19:30
会場：管理棟3階会議室
講師：英国総合診療専門医 澤憲明先生
Royal College of General Practitioners
Patrick Hutt 先生
- 第134回地域医療講演会
「緊急度判定支援システム JTAS と
院内トリアージ：最新動向」
日時：6月6日(金) 18:00～19:00
会場：管理棟3階会議室
講師：富山大学附属病院副院長
災害・救命センター長 奥寺敬先生

2014年2月の診療数 システム管理室

近森会グループ

外来患者数 15,919人
新入院患者数 732人
退院患者数 742人

近森病院(急性期)

平均在院日数 14.24日
地域医療支援病院紹介率 88.08%
救急車搬入件数 332件
うち入院件数 179件
手術件数 355件
うち手術室実施 243件
→うち全身麻酔件数 143件

● 平成26年2月 県外出張件数 ●
件数 81件 延べ人数 159人

ワイン講座 ● 21

ぶどう品種を知り、個性を探る

白ぶどうその① シャルドネ

高貴な品種として知られるシャルドネ種。ワイン好きなら、誰もが聞いたことのある白ぶどうの王様でありながら最もポピュラーな品種。シャルドネという名前は、フランス、ブルゴーニュ地方のマコネ地区にある同名の村が発祥と言われていました。

栽培されている地域は、冷涼なシャンパーニュ地方から、温暖なチリや、オーストラリアまで、適応能力が非常に高い品種で、品種の個性と言うよりは、ぶどうが育ったテロワール(土壌)の個性を色濃くワインに反映します。従って、シャルドネはシャルドネでも、その風味は産地によって大きく異なります。

例えば、冷涼な地域のシャルドネは、清涼感があり、ミネラルを感じる風味を持ちますが、温暖な地域のシャルドネは南国のフルーツを感じさせる風味を持ちま

ドゥラモット・ブリュット・ブラン・ド・ブラン/ドゥラモット/フランス、シャンパーニュ地方 ● コメント：白ぶどう 100%で造られたブラン・ド・ブラン (Blanc de Blancs)。瓶内熟成が長いものは、きめ細かな泡立ちと、滑らかな味わいとなります。

す。ラベルから読み取ることには出来ませんが、ワインを醗酵、貯蔵させる過程で、樽を使用するかしないかでその個性も大きく変わります。

ポピュラーなシャブリのようなタイプにはシンプルな魚貝類の料理。樽熟成させたものや複雑味のあるものは甲殻類やコクのあるソース、味の濃い料理、中華料理との相性もいでしょう。シンプルに料理抜きでワインだけを楽しむのもいいでしょう。

鬼田知明(有限会社鬼田酒店代表)



第 128 回地域医療講演会報告

多職種で診る足外来を開催して

近森リハビリテーション病院
リハビリテーション科科长 和田 恵美子



福岡県久留米市の
新古賀クリニックより
看護師の石橋理津子
師長とリハビリテ
ーション部の猪熊
美保副主任が来院さ
れ足外来について講演
していただきました。

糖尿病外来に来院した
ときに同時に看護師
主体での足のチェッ
クとケア、理学療法
士による運動指導が
リンク

する仕組みがうまく
できている印象で、
足趾にいたるまでの
関節可動域のチェッ
クの仕方や歩行の指
導など今後リハビリ
テーション科として
も関わる重要性を
感じました。

糖尿病や下肢の血管
の病気がある方は、
とくに足のトラブル
に悩まれていること
も多いと思います。
小さな創や胼胝(タ
コ)のうちに相談し
ていただければ下
肢切断を防ぐ



▲新古賀病院看護師
長の石橋理津子先生



▲新古賀クリニックリ
ハビリテーション部副
主任の猪熊美保先生

ことができます。多職
種での連携、他科と
の連携で足へ注目を
していきたいものです。
わだ えみこ

第 129 回地域医療講演会報告

植込み型除細動器患者の
メンタルケア

近森病院循環器内科部長 深谷 眞彦



致死性の心室性不
整脈の患者さんに
植込み型除細動器
(ICD)の植込み治
療が行われます。当
院でも次第にその
患者さんが増加し
てきています。ICD
は、見たところペ
ースメーカによく
似ていて、植込み
術も循環器内科医
が同様にできるも
のです。しかし、そ
の治療目的は大
きく異なります。そ
れは、ICDは致死
性の不整脈が出現
した

時に救命するための
対症療法が目的の
もので、予防目的
のものではないとい
うことです。このた
め、発作出現に対
する不安とか、ICD
の誤作動に対する
不安とか、メンタル
面でのいろいろな
問題に対するケア
も大切です。樗木
先生は循環器内科
医ですが、早くか
この問題に取り組
み、臨床の現場に
必要な情報を発
信してこられました。

今回の先生のご講演
を聴講して、

ICDは植込み後の
患者さんのメンタル
ケアも大切です。が
、時には植込み前
からの介入も必要
であることが判り
ました。近森病院
のチーム医療の力
こそが患者さんの
ためになる領域と
実感しました。

ふかたに まさひこ

▼九州大学大学院医学
研究院保健学部門教
授の樗木晶子先生



第 130 回地域医療講演会報告

これからの医療提供体制の
あるべき姿を考える

近森会グループ
管理部長 川添 昇



急増する高齢者と
激減する若年層の
医療提供体制をど
のように再編してゆ
くのか、いま日本
は大きな課題を抱
えている。国が進
めている2025年
の社会保障・税一
体改革もむろん
であるが、総人口
そのものも確実に
一億人を割り込む
という、さらに長
いスパンで考え
ていかなければ
ならない。

国の財政状況を
考えれば、高齢者
に

対する一人当りの
医療介護サービス
量を減らす以外
方法はないよう
に見受けられる。
調査によれば、
手厚い医療介護
をすればするほ
ど虚弱や要介護
の期間を長期化
させ、逆の場合
は短期間で死亡
するか、虚弱の
人が自立に戻る
可能性も高いと
いう皮肉な結果
も見受けられた
、と高橋先生は
語る。

東京や大都市周
辺の激増する高
齢者の医療事情
や対応策、すで
に日本屈指の超
高齢社会に突入
した高知県、日
本

一多い病床数、
高知市への集中
や周辺部の医療
過疎状況などを
比較して、非常
に分かりやすく
有意義な講演を
していただいた。
先生は全国の医
療圏を周られ、
フィールドワーク
の成果によって
これからの医療
・介護を導いて
いただきたいと
期待している。
かわぞえ のぼる



▼国際医療福祉大学
大学院教授の高橋
泰先生

「なりたい自分になる」、 「自分らしさが輝く」を応援する！

近森病院総合心療センター看護部長
兼近森会看護部キャリア開発課長 松永 智香



向かって後列左から中村師長、森本師長、山崎師長、前列左から杉村師長、筆者

これまで近森会看護部教育委員会は、看護の質の向上と看護職者たちのキャリア開発をめざして活動してきました。

今年の4月1日より、「看護部キャリア開発課」は、看護部教育委員会とラダー評価委員会を統括する形で運用することとなりました。技術の習熟度や経験年数に応じて段階的な継続教育「知識、技術、態度、行動」と、その人のライフワークに応じたキャリア開発支援「相談、調整」が、おもな機能になると考えております。

看護部教育委員会は、委員長の杉村多代師長、近森病院の森本志保師長、影山美佳師長、山中由美子介護福祉士長、佐藤久美子主任、総合心療センターの山中俊典主任、近森リハビリテーション病院の中村里江シニア師長、オルソリハビリテーション病院の山崎成美師長（以上教育代表者）の皆さんで構成されています。

ラダー評価委員会は各院の看護部長（ほか未定）で構成されており、これまで以上に近森会の看護職員が、「なりたい自分になる」、「自分らしさが輝く」よう、応援していきたいと思っています。近森会のみなさまもぜひご支

援ください。

看護部教育委員会の部屋は、総合心療センターの1階にあります。いつで

も、来てくださいね。

まつなが ともか

ワッペン、バッジ、広報誌あれこれ 2

CNS ワッペンの紹介

近森会看護部統括看護部長
老人看護専門看護師 岡本 充子



専門看護師（CNS）になると日本看護協会から認定バッジが渡されるため、認定バッジをつけて勤務していました。

つけやすさからネームプレートに認定バッジをつけていましたが、ネームプレートが変更になり、認定バッジがつけられなくなったのをきっかけに、看護部認定の会で検討し、ワッペンを作成することになりました。

認定バッジがつけられ、患者さんやスタッフの皆さんにCNSであることがすぐに分かるようにすることを旨とし、サイズや白衣の色にマッチする色調を選択し、医療の象徴として用いられているアスクレピオスの杖とCNSの文字、近森マークを入れたデザインとしました。

デザインは看護部長室秘書である松元さんが考えてくれました。いかがでしょうか？

おかもと じゅんこ



お弁当拝見 24



5C 風サラメシ

近森病院5C病棟
女子力向上委員会



今日のお弁当は総勢7名の「5C風サラメシ」です。子どもの準備や朝ご飯、身仕度などに、とにかく母親は朝が忙しい。仕事での5C女子はあれやこれやとなりふり構わずバタバタでこれまた忙しい。

けれどランチになると、こんなかわいいお弁当が休憩室をパッと明るくします。今日は、お庭に咲いてい



たという水仙を愛でながら。「5C女子」と実感できる大事なお弁当です。消費税もUPしますが、負けずに節約して、女子力UPしましょうね。

私の趣味

楽しい 野菜づくり

近森病院放射線科外来

看護師 川田 ゆかり



▲野菜づくりで季節の移ろいを感じながら▼米農家から藁をいただきました



もの作りが好きな私が野菜をつくろうと市民農園に応募したのがきっかけでした。早速主人と畑を見に行ったのはいいのですが…荒れ地のような畑を見わたして二人でどうしたらいいものか？ と正直思ったことでした。まずは土作りからのスタートです。クワで畑を耕し有機無農薬栽培のため堆肥をまき枯葉や藁をかき集めて肥料にし、土に栄養を与えてどうかこう野菜を植えられる状態になりました。今では週に一回のペースで通ってます。

野菜作りも今年で2年目。まだまだ初心者ですが、いろいろな方に指導をいただき夏は暑さと虫との戦い（虫が怖い！）冬は寒さに耐え少しずつですが様々な野菜が収穫できるようになりました。

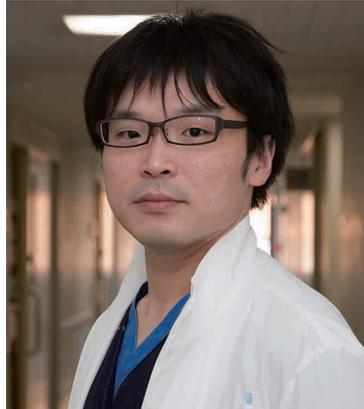
なにより季節の移ろいを感じることができ、たくさん取れた野菜は職場のみんなにお裾分け、取れた野菜をおいしいと言ってもらえる事が何よりの楽しみです。

もっばらわたしの役目は収穫と草引きがメイン（笑）。絹さやとえんどう豆の花が咲きました。収穫が楽しみ！ 米農家さんより藁をいただきました！

かわだ ゆかり

乞！熱烈応援

恵まれて

近森病院外科科長
辻井 茂宏

医師になって10年、初期研修、後期研修、現在とほんとうに恵まれた環境でのびのびさせてもらいました。外科といえば手術ですが、初期研修医のころからたくさん執刀をさせてもらい、助手として手術に入った記憶がほとんどないほど恵まれてきました。だから、こんな僕でもなんとか外科医としてそれなりに働けるようになったと思っています。

近森病院では、外科だけでなく、研修医のみんな、ER、放射線科、麻酔科など他科の多くの先生方、メディカルスタッフの方に助けていただき、感謝しきれません。これまでは恵まれるばかりでしたが、これからは少しでも近森病院に貢献できるように頑張ろうと思います。

つじい しげひろ

前向きに！

診療支援部医事課主任
佐伯 佳奈子

近森会に就職してはや13年が過ぎました。これまで多くの先輩方や後輩のみなさん、他の部署の方々にも助けられながら、受付から始まりカルテ室、文書係、入院請求担当へと、無事勤めてくることが出来ました。

3月1日付けで主任心得の辞令をいただきましたが、まだまだ未熟な私に務まるのかどうか正直不安でいっぱいです。しかし、これから仕事の幅をもっともっと広げられる機会を与えていただいたのだと前向きにとらえ、医事課全体に目を向け、みんなの力になれるよう、日々努力して行きたいと思っています。

ご迷惑をおかけすることが多々あると思いますが、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

さえき かなこ

近森会
保育室

「そると」みんなや家族でお別れ会の遠足に「西島園芸団地」に行きました。



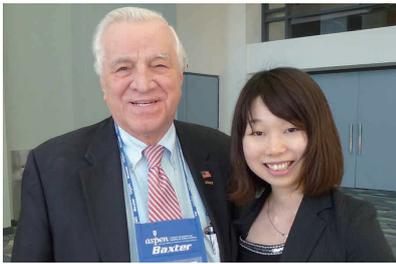
▲▲煮詰めたいちごは「おいしい！」

▶家族三人でいちごを頬張りながら



アメリカの臨床栄養士と栄養療法

▼ジョージア州アトランタ
のエモリー大学病院



◀ TPN (高カロリー輸液) を考案したダドリック先生と筆者

近森病院臨床栄養部
管理栄養士 中西 花

臨床栄養士を志したきっかけ、それは高校3年生の夏、テレビの特集でアメリカの栄養サポートチーム (NST) で働く管理栄養士を目の当たりにしたのが最初でした。それから9年の歳月が経ち、臨床栄養部宮澤部長のご配慮で、アメリカ静脈経腸栄養学会 (ASPEN) の

参加とアトランタのエモリー大学病院の見学の機会をいただきました。

夢にまでみた海外の学会は私にとってとても眩しく、教科書や論文でしか名前をみたことのない研究者達が最新の栄養学について発表していました。



また栄養管理は「栄養療法」という1つの「治療戦略」として議論されてきました。エモリー大学の大学病院の見学では、日本の管理栄養士業務にはない面も直に見せていただきました。通常日本の場合は管理栄養士に高カロリー輸液など静脈栄養の処方権はありませんが、アメリカの管理栄養士は高カロリー輸液の処方箋を片手に病棟を駆け回っていました。

そのような中で圧倒されながらも、まだまだ栄養学という分野の未知なる部分やさらなる可能性を肌で感じることができました。「必要な時に 必要な栄養管理を すべての患者さんへ」これは近森病院臨床栄養部が掲げる目標です。治療のベースとなる「栄養」という土台を作るために、患者さんと向き合いながら患者さんに寄り添える栄養療法をこれからも行っていきたいと改めて感じました。

なかにし はな

PS サポーター

近森リハビリテーション病院
2階東病棟介護福祉士
中屋 吉博



大切な居場所の一つとなるよう

「学生時代は楽しかったですか?」と聞かれると皆さんなんと答えるのでしょうか。私は勉強は嫌いでしたが、学校は好きでした。勉強が嫌いな私がなぜ学校が好きだったのか。いま思い返せば、そこに自分の居場所があり、周囲の人を大切に思えたからだと感じます。PS サポーターとして、患者さんへの満足向上はもちろん、スタッフの皆さんにとっても、近森会が大切な居場所の一つとなるようお手伝いできるような活動を行って行きたいと考えています。

なかや よしひろ

== PS サポーターの二期生認定授与式を 2014 年 3 月 14 日に行いました ==



職員旅行

今回はデンマークのオスロ、コペンハーゲンなどの都市を巡る北欧とモロッコ、北海道の職員旅行の紹介です。

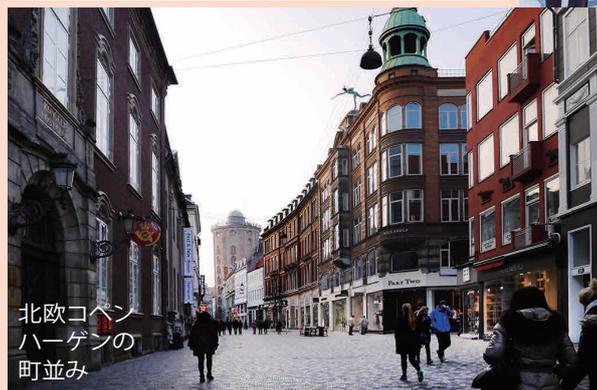


◀カサブランカ市内で記念撮影▶モロッコ式ミントティーの入れ方。国民はお茶が大好き。世界有数のお茶の輸入国でもある▼マラケシュの市場の香辛料売り



▼フェズ市場でお菓子の山を前に満悦そうな店主 ▼モロッコの美女と

▼コペンハーゲン。今流行りの北欧照明



北欧コペンハーゲンの町並み



▲マイナス8℃の北海道雪まつりの氷のなかで

◀北海道登別温泉の地獄谷で

おめでとう

図書室便り (2014年2月受入分)

- 医学教育を学び始める人のために / Ronald M. Harden (他著)、大西弘高 (監訳)
- How to 産業保健3 メンタルヘルスどう進める? 職場復帰支援の実務 / 廣尚典
- How to 産業保健7 メンタルヘルス対策のすすめ方: ステージ別実践法 / 藤代一也
- 産業保健マニュアル改訂6版 / 森晃爾 (総編)
- 外保連試案2014: 手術・処置・生体検査・麻酔試案 / 外科系学会社会保険委員会連合 (編)

- 医療事務職のための電子カルテ入門 / 津村 宏 (他編)

《別冊・増刊号》

- 別冊医学のあゆみ うつ病—治療・研究の最前線 / 功力浩 (編)
- INFECTION CONTROL 2009 年秋季増刊号 現場ですぐ使える洗浄・消毒・滅菌の絶対ルール 227 & エビデンス / 大久保憲 (編)

《視聴覚資料》

- VIDEO JOURNAL of Japan Neurosurgery Vol.21 No.2 / 永田泉 (監)

▼今回から新しくコミュニケーション委員長に就任した土居義典学術担当理事

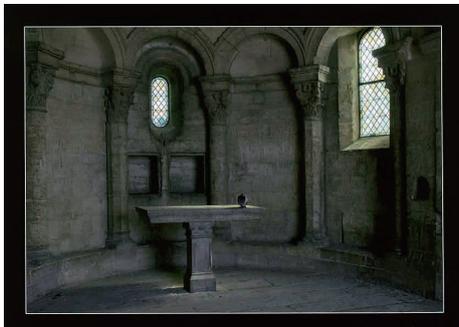


近森会グループ 第二回芸術祭

恒例の芸術祭に、今年もすばらしい作品が集まりました。いずれも作者の熱い思いが伝わってくる力作ばかりで、優秀作品を選考するのも一苦労でした。この芸術祭が職員みんなの楽しい交流の場として生かされるように、来年も多くの方のご応募をお待ちしています。

コミュニケーション委員会委員長 土居義典

▼理事賞賞「バイオカオウレン」木漏れ日の中、可憐に小さな花が絨毯のように敷き詰められ、そのなかにスクッと立つ木々の美しさを見出した高い芸術性の作品です●岡本明才・四国管財ポーター／賞をいただいただけとは正直思っていませんでした。風景写真は得意ではないので、これをきっかけに新たな作品制作の意欲が湧いてきました。



▲理事賞賞「斜光〜アヴィニヨンの橋の上で」小さい聖堂に鳩が一羽、一瞬の高い芸術性がある作品です●山本彰・近森病院呼吸器外科部長／昨年の職員旅行で早春の南フランスを旅したとき、アヴィニヨンの橋の上に小さな聖堂があり、そのステンドグラスを通した光の中に鳩を見つけました。思わずカメラのシャッターを押し続けました。今回望外な賞を頂き、彼の地を再訪することを想わずにはられません。



▼コミュニケーション委員長賞「あめあがり」春を感じさせるさわやかな作品です●米澤真理子・臨床検査部／いの町の奥、仁淀川の近くに行ったとき、枝の曲線とお花の可憐さに惹かれシャッターを切りました。みんなに見ていただくことが励みとなります。また来年の芸術祭に出品して、誰かの目に留まるような写真を撮りたいと思います。



▼管理部長賞「ちかもり家」チームちかもりで踊る生き生きとした職員らに勢いを感じる作品です●宮崎延裕・近森病院放射線科科長／チームちかもりのなんちゃってオフィシャルカメラマンを勝手に務め、やりたい放題させて頂き、皆さんの素晴らしい笑顔に「撮らされた」だけです(笑)楽しい雰囲気を与えられ良かったです。ありがとうございました。



▲管理部長賞「みつめる先…」意志の強さを感じる作品です●清水多得子・近森病院総合心療センター秘書／子犬の時から我が家で育った彼はとても表情も豊かに育ちました(飼い主の思い込み?)。被写体としてとてもりりしく、かっこよくポーズを決めてくれました。賞をいただけたことに感謝をし、彼にもご褒美をあげたいと思います。



▼コミュニケーション委員長賞「おまけのミラボー通り」フランスの街角のカフェでエスプレッソを楽しむみんなの笑顔が印象的な作品で、みんなの話し声とエスプレッソの香りがする場面です●上村絹子・オルソ外来／昨年の職員旅行で南フランスへ行った思い出に描きました。帰国日に大雪のためフランス航空がフライト出来ず、おまけのミラボー通り観光で、賞までいただき、私にとって本当のおまけとなりました。



▶看護部長賞「セレモニードレス」一針一針に込められた愛情を感じる素敵な作品です●門田千穂・近森リハビリテーション病院リハビリテーション部理学療法士／妹に頼まれ姪のために作った退院着。出産に間に合うかアタフタでした。温かい評がありがたく、手芸を教えてくれた母、作ったもの全てきれいに取っておいてくれた妹にも感謝しています。



◀看護部長賞「生花」柔らかい春の日差しを感じる可愛らしく心が癒やされる作品です●谷仁美・近森病院医療安全管理室／賞をいただいただけとは



思ってもおらず、ただただ驚き、大変光栄に感じております。3年前は私が華道?!と、思いましたが、今は花に向き合うことが楽しく癒しになっています。

▶ 仕事中のひとこま

仕事しているか、 走っているか、家族といるか

どっちがホント？ 両方ホント!?

「恥ずべきことは、人を枠にハマて見ること。医療もそう、目の前の人をそのまま受け容れること。これがいちばん大事やと思っています!」。言葉ひとつに厳密で、言い回しは慎重で……。ざっくばらん、あっけらかんといった普段の要先生とはおよそかけ離れた雰囲気、話が始まった。

医者になった理由も、循環器内科を目指したきっかけも、「ムズカシイよね〜。そんなに簡単ではないよね〜」「…………」。 「目の前の患者さんが静かに退院していかれる、これは大きな喜び。これははっきり言えるねえ」としみじみ。「趣味はマラソン。なんで走り始めたかなあ……、んー……。走ることは自分を試すこと。始めも終わりも全部自分で決められるもの。そして、んー……。インタビューが進むうちに霧が晴れるかといえば、哲学的で今を生きる禅僧侶のような厳しさで、話はなかなか難しい。

合間には仕事用 PHS が何度も何度も鳴り、いきなり 2 オクターブ跳ね上がった声で勢いよく、「はい、じゃ、よろしくお願いします!」と指示が終わると、また元の静寂にトーンダウンし、「んー」と考え込む。明るい要先生と、言葉ひとつに厳密さを求めて、妙に寡黙な要先生。

常に求められる仕事への気概

一転、仕事の話になると、さすが若手のホープは流暢で淀みがない。「スタッフが誇りを持てるような治療をするのが医師の務めであり、チームの中でやるべきことはたくさんあるが、常に第一線で仲間と切磋琢磨できる気概を持ち続けることが自分ら職人のとるべき態度。超特急で走り続ける近森トレインは窓からの景色も目まぐるしく変わり、だからこそ高知県のリーディングホスピタル群に在るという気概が常に求められる!」と歯切れがよい。

こういうことは常々思っているというのか、最愛の同志の妻ととことん話し合うというのか、いかに生きるべき



▲第19回四万十ウルトラマラソン。60Kmを完走! 愛娘の美帆ちゃんと

か、が常に最大のテーマでもある。

学芸高校の同級生の妻とは10年付き合ひ、結婚して11年目にひとり娘に恵まれた。「二人でしっかり生きていこう!」と納得していた二人の、喜びの大きさはとても簡単には表現できないのだが、「しっかり生きる力をつける」ことが当面の子育ての目標となっている。一所懸命に教師を続けていた妻は、小学校への入学が近づいた娘のために、「夢だった子育てをしたい!」と、退職を決意した。ベストを尽くして育てたい、やはり気概に満ちた妻でもある。

価値観の近い二人だから、小学校への入学を手がかからなくなるから母の時間が増えたとするのはなく、子育てにもっと比重をかけたいと願う妻を夫もスナナリ理解できるのだろう。

沸き立つエネルギー源を探す

「仕事しているか走っているか家族といるか」、この三つしかない日常だが他に欲しいものはない。満ち足りているのだ。家族にそして周りにしみじみ感謝できる毎日なのだ。

自分を大好きでその感覚を大事にしたいと思うからこそ、妻も大事、娘も大事、そしておろんスタッフや患者さんを大事に思う心が生まれるのだという。「肉体は老いても、魂は成長し続けるのが人の素晴らしさ」だと語る要先生。ルーツを辿ると、その昔、台湾人だった祖父を追いかけて日本に来た父親が、日本を気に入り長崎に定住し、神戸の



人と結婚して日本の暮らしが始まった。

長崎大学で学び、幡多地方の当時の西南病院(現・幡多けんみん病院)で長く医者を務めた父親に、「国籍ゆえに肩身の狭い思いをすることなく、しっかり生きられる手立てを見つけて下さい」と言われ、それが結局のところ姉二人と致嘉さんの三人皆が医者になった直接のきっかけということらしい。

大らかで、ハマる枠のないような要先生の、沸き立つエネルギー源の一端がのぞけたのかもしれない。いずれにしても、「天職と思える職業に巡り合った倅せ」は何ものにも代え難い、ようだ。

編集室通信

最近は趣味らしい趣味を、見つけることが出来なく何かないものかと探しています。昔は乗馬やボディーボードなどスポーツ系を楽しんでいましたが、年齢のためか足が遠のいています。先日、15年振りぐらいにスノーボードをしてみました。やっぱり体を動かすのは楽しいですね。しかも意外と滑れることが、嬉しい誤算でした！ 今期は終了ですが、来シーズンは再開してみようと思っています。 (奥)